



朝鮮通信使行列図大絵馬（川越氷川神社蔵）

朝鮮通信使とは、朝鮮国王の国書・進物を携えて日本に派遣された外交使節団で、江戸時代には12回来朝しました。江戸幕府は海外渡航禁止令等により鎖国体制を確立しましたが、わずかに朝鮮と琉球を「通信」の国、オランダと中国を「通商」の国と定めて、国際関係を維持しました。「通信」の国とは、心を通わせる国という意味です。

江戸時代の来朝の内、初期の3回は答礼と文禄・慶長の役の捕虜帰国のための派遣でしたが、その後は徳川將軍代替わりごとの派遣が定例となりました。通信使のおおよその経路は、朝鮮の釜山から海路で対馬、壱岐と渡り、瀬戸内海の港に立ち寄りながら東上して大坂に入り、京都から東海道を江戸に向かいました。使節団は江戸城で国書を交換し、時には日光東照宮に

も参詣しました。通信使には、朝鮮王朝を代表する学者等が任じられたため、沿道の宿泊・休憩所には、各地の文人らが参集し、詩文の応酬などの文化交流が行われました。

この大絵馬には、通信使の行列が4段に区切って描かれています。1段目には道を清める清道旗、2段目には楽士、3段目には輿にのった国書と正使、4段目にはやはり輿にのった副使と従事官の姿などが描かれています。裏面には「于時享保元丙申歳十一月十五日」の墨書が、また絵馬の木枠には「奉再興」「御宝前」「明和七庚寅」「九月吉祥日」の陰刻が認められます。どのような経過でこの大絵馬が奉納されたか不明ですが、江戸時代の氷川祭礼には本町の付祭に朝鮮通信使の仮装行列が出ており、祭礼との関連性が窺われます。

野外博物館教室「まちなかの美をあるく」から

野外博物館教室は、博物館から外に出て川越の歴史や文化財を実際に見ることを主体として、年4回実施しています。今回取り上げた「まちなかの美をあるく」は副題に「寺社の彫刻を見る」と掲げ、特に欄間などに据えられた彫刻を見ながら、寺社を巡るものになりました。当日は寺社彫刻研究家の相原悦夫氏を講師にお招きし、詳細な説明をいただきながら氷川神社・行伝寺・蓮馨寺・成田山川越別院・東照宮などを巡りました。

ご存知のとおり、川越市内にはたくさんさかのぼの寺院・神社があります。建物として残っているものは、古くても16世紀後半を遡らず、多くは江戸時代後期以降の建築です。寺院や神社がごう豪華な彫刻によって装飾されるのは江戸時代末期以降で、市内には多く残っていますが、今回の見学は博物館から至近の寺社を対象としました。これらは彫刻の制作時期が異なり、江戸時代前期の建築である仙波東照宮本殿、江戸時代後期の建築である行伝寺本堂、明治初期の氷川神社本殿、明治中期の蓮馨寺本堂・水屋、成田山川越別院というようにバラエティに富んだ構成になりました。

市内の寺社のうち、喜多院の庫裏や仙波東照宮、氷



行伝寺本堂全景

川神社内の八坂神社などはその由緒がはっきりしており、資料的にも江戸前期の建築であることがわかります。喜多院の庫裏は寛永15年の大火で堂宇が焼失した際、江戸城の紅葉山御殿を移築したと言われていもみじやまます。仙波東照宮も喜多院同様焼失後に現在の地に移され、本殿を建築したと考えられ、寛永17年の棟札が残されています。また、八坂神社は江戸城内の東照宮のはいでん拝殿・幣殿部分を移築したと考えられており、川越城内の三芳野神社のぞとみや外宮として移築されたものが、さらに明治になって現在の氷川神社境内に移築されたと推定されています。これらの建物については幕府の命によって

工事が行われており、幕府のふしんがた普請方によるいわゆる官営工事でした。特徴としては複雑な木組や彫刻が少ないなど、質素な外観が共通しています。

江戸時代後期になると、川越城下の経済的繁栄に伴い、町の富裕層が競って寺社に寄進を行うようになります。つまり、町人主導による川越の職人による寺社の建築が行われるようになったのです。そのため、特に幕末期以降には「江戸彫」と呼ばれる技巧に富んだ絢爛豪華な彫刻が本殿などに多用され、ほとんど建物全体に彫刻がすき間なく配されるようになります。その代表的な作品としては明治



行伝寺本堂唐破風の彫刻

3年建築の水川神社本殿が挙げられ、川越城本丸御殿の造営に関わった印藤捨五郎が正棟梁、桑村三右衛門が副棟梁としてその手腕を振るっています。とくに本殿床下の腰板には川越水川祭礼の山車行事の人形を題材にした彫刻がはめ込まれており、これらは19世紀中頃に活躍する彫物師嶋村俊表の作品として知られています。俊表は嶋村俊元を祖とする彫物師嶋村家の8代目で、成田山新勝寺釈迦堂（千葉県成田市）などの彫刻を手がけています。嶋村家は江戸中期から活躍する江戸彫物大工で、石川家・後藤家とともに彫物大工御三家の一つに数えられました。俊表は川越にいくつかの作品を残しましたが、春日神社本殿（砂新田）を手がけた嶋村俊正とともに嶋村俊元八代目を名のっており、俊表・俊正の関係はわかりませんが、兄弟という説もあります。



成田山川越別院水屋全景

装飾に富んだ寺社建築は明治になるとやや簡素化され、寺社の彫刻は次第に簡略化されていきます。ところが、一人の名工の出現により、市内のいくつかの寺社に江戸時代後期のような技巧に富んだ優れた彫刻が配されます。この名工こそ大正年間に川越を中心に活躍した野本民之助で、民之助は24歳頃から市内や近隣の寺社の欄間彫刻などを手がけ、優れた作品を残しています。惜しくも36歳で他界しますが、10年余りの短い創作期間には成田山川越別院本堂の「目抜き龍」や山門の「虎を論ず僧」、成田市宗吾霊堂の大額などの秀作を残し、その技術の高さと芸術性を今でも見ることができます。

今回取り上げた寺社彫刻は建物の欄間や梁の上など、私たちの視線よりも高い所に配されることが多く、意外に見落とされることが少なくありません。特に明治以降の寺社は、建物そのものは比較的簡素にまとめら



蓮馨寺水屋の彫刻

れており、一見しただけでは目に付きにくいということもあります。しかし、ひとたびそこに彫刻が配されていることに気づくと、何気ない山門やお堂の中の小さな彫刻が強烈な存在感をもって私たちの視野に飛び込んできます。微細な彫刻と大胆な図柄も、その存在感の大きな要素であり、動かないはずの彫刻に躍動感を与え、見る者の意識に訴えかけてきます。

市内にある多くの寺社には、まだまだ私たちの気づいていない文化財が眠っているのかもしれませんが。私たちはこれからもこのような機会を通じて、みなさんに紹介し、見学会などを実施していきたいと考えております。みなさんも川越を散策する際には、寺社も含めて、ぜひ四方に眼を配りながら歩いていただくことをお勧めします。日頃何気なく通り過ぎているところや、かつて観光として訪れたところにも新たな発見があるかもしれません。その発見こそ、川越を散策する醍醐味といえるのではないのでしょうか。

(教育普及係 天ヶ嶋岳)



成田山川越別院水屋の彫刻

市民ボランティア活躍中

川越市立博物館では年間を通じて数多くの講座や教室、講演会を開催しています(平成18年度は43事業)。対象も子どもから大人まで様々です。当然、限られた職員の人数で対応するのは難しく、ボランティアの協力が必要になってきます。

川越市立博物館のボランティアには大人の「市民ボランティア」と小・中学生の「ジュニアボランティア」があり、それぞれ活動しています。今回は市民ボランティアについて紹介しましょう。

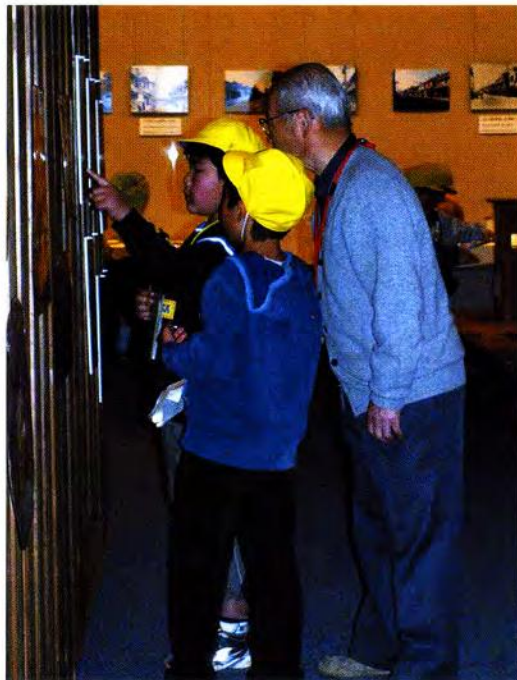
現在、ボランティアの数は20人。現役を退いた方も多くいますが、中には40代、50代の方もいて、それぞれ興味のある事業や得意とする分野を生かせる事業に参加しています。

ボランティアの仕事を列記すると

- 子ども対象の講座や教室の講師や助手
- 大人向けの講座の受付・準備・後片付け
- 野外博物館教室の引率
- 川越城本丸御殿のガイド
- 「ミニ展」(市内の小学3年生の来館時)での解説・体験指導

などです。

この他に毎月第1日曜日に定例会を開き、職員との打合せや情報交換を行っています。



教育普及の仕事で市民ボランティアは、なくてはならない大切な存在と言えるでしょう。

どうしてボランティアになったのか聞いてみると、多くの人が「やりがいや達成感がある」と答えています。

ボランティアは、博物館の強力な応援団と言えるでしょう。

これからも、ボランティアが活動しやすい環境を整え、博物館とボランティアが協力し、より良い事業を市民の皆さんに提供していけるように努めていきたいと考えています。

(教育普及係 石黒義弘)



新収集品展「古鏡百選」について

会期 11月25日(土)～12月17日(日)

現在、特別展示室にて新収集品展「古鏡百選」を開催しております。この度、鶴ヶ島市在住の古美術収集家から600面に及ぶ銅鏡の寄託を受けました。今回の展示は、この中から100面余りを広く公開するものです。

銅鏡とは銅に錫や鉛を加えた青銅製の鏡のことで、中国では殷代（紀元前11世紀以前）に既に存在し、西洋からガラス鏡が伝来普及するまで幅広く用いられてきました。寄託された資料は紀元前に铸造された中国鏡から江戸時代の柄鏡、銅鏡を模した現代の文鎮まで多岐にわたります。展示では中国鏡の部・和鏡の部・テーマ展示「准提咒文鏡」の3部構成で、2000年にわたる銅鏡の歴史を見ていきます。

従来、中国鏡において研究や収集の対象となっていたのは、専ら歴史的あるいは美術的価値のある分野であったと言えるでしょう。前者では戦国時代から三国時代まで（前5～3世紀）の、後者ではとりわけ隋唐王朝（7～10世紀）の華麗な鏡に研究者や好事家たちの関心が集中してきました。

今回の展示では铸造技術の精華とも言えるこうした鏡も多く展示しておりますが、寄託を受けたコレクションには、宋代（10～13世紀）以降の鏡も多く含まれています。中国鏡の長い歴史において、宋代以降は銅鏡の製造技術が衰退し、創造性に乏しくなったと考えられてきました。実際に展示資料の多くも、金属の質が悪く、鑄型からのヌケも甘いため、何を表現したものか分かりづらいかと思われます。しかしこの時代の鏡には、それ以前には見られない意匠を持つものが多く、とりわけ土俗信仰や故事伝説に取材したモチーフは、鏡が特権階級から一般庶民へと普及していく現場を捉えており大変興味深いものです。この時代の鏡には、従来の歴史的または美術的な価値に対して、文化的な価値が認められると所蔵者は語ります。

続く和鏡の部では、江戸時代の柄鏡を中心に展示しております。弥生時代に中国から伝来した銅鏡は次第に和様化し、日本的な意匠を整えていきましたが、これを決定的にしたのが室町時代に誕生し、江戸時代に爆発的に普及した柄鏡です。江戸時代を通じて形式こそ一定でしたが、鏡背全面をカンパスに使えるという自由度の高さから、実に多彩な文様が描かれました。

柄鏡のデザインとしては、有職文様であった「桐に鳳凰」のように古式ゆかしいものもあれば、製作者の手によって即興的に組み合わせられたとおぼしきものもありました。例えば「葡萄に栗鼠」は桃山時代に輸出用を主として用いられた組み合わせで、西欧では日本的な図柄として好まれました。文様に固有の意味よりも、他との差異から生じる関係的な意味に重点が置かれるようになったのです。江戸時代に入り、消費社会の色が濃くなると、このことはますます加速していきました。奢侈品から日用品へと移行することで自らを差別化することを迫られた柄鏡は、職人の手を離れて流過程に乗った途端に記号と化し、流行として機能していきました。

人気の高い文様は、踏み返し法などを用いて際限なく複製されていきました。その結果、文様の持つ恣意性は覆い隠され、はじめからそれが「伝統的な」文様だったのだと考えられるようになりました。

コレクションにはこうした伝統の起源に裂け目を入れるような、奇妙な組み合わせの柄鏡も存在します。展示資料の中では「竹に軍鶏」が現在ではあまり見られない取り合わせです。きわめて日本的な文様の隣に展示された奇妙な取り合わせの文様を眺めると、伝統的とされる文様にも様々な可能性があったことに思い至るのです。

以上は担当者による「読み」の一例ですが、実際に展示室に足をお運びいただければ、様々な感想を抱かれることでしょう。2000年にわたる銅鏡の歴史を一度に御覧になれる展示です。是非お越しください。

(学芸係 大野圭司)

背景は「許由洗耳鏡」

帝堯が天下を譲ろうとした隠者許由がこれを不快に思い、川で耳を洗い清めた故事を描いています。

バス利用における 博物館活用について



当館では、市内小・中学生に対し、バスを配車して博物館活用の援助を行っています。これは、博物館が児童生徒の教育活動を支援し、社会科等の学習効果を高めるとともに、博物館や郷土の文化財への理解を深め愛護する心を養うことを目的として、開館以来実施している事業です。本年度も、1学期間にバスで来館した学校は25校、小学生2278名（引率教員含む）が来館しました。館内では、事前に用意されたワークシートに書き込んだり、体験活動を行ったりと様々な学習活動が展開されました。

そこで、今回は、社会科における博物館の活用について述べます。

特に、1学期に実施される博物館を活用した社会科学習は、歴史学習の導入として、また、縄文、弥生、古墳時代の原始・古代を中心とした学習の発展・まとめとしての位置付けが多く、これらのニーズに応えられるよう、博物館も常設展示を中心とした学習活動が十分できるよう支援します。

（1）歴史学習の導入としての活用例

6年生の子どもたちに「学校の勉強では何がおもしろい。」と聞くと、「社会科の歴史がおもしろい。」という、うれしい答えが多く返ってきます。5年生までの学習と異なり、我が国の歴史を初めて学習することから、子どもたちの興味・関心はとて高いことが窺われます。そこで、さらに歴史に対する興味・関心を高め、歴史を学ぶ楽しさやその大切さを気付かせるようにする必要があります。

ある学校では、普段、教科書や資料集等でしか接することのできない縄文土器（破片）を自分の手で触り、その質感や色、匂いなど五感を通した体験的な学習を展開しました。どの子も縄文土器を観察しながら、その歴史の重さと当時の生活を身近なものと感じることができたようです。このように、博物館でしかできない観察や調査、体験などの多様な学習活動を展開することにより、子どもたちが意欲的に学習に取り組み、これからの歴史学習の仕方や態度を身につけることがより期待できます。

（2）学習の発展・まとめとしての活用例

古代の歴史の中で、子どもたちの興味関心が高いも



ののの一つに「^{はにわ}埴輪」があります。確かに、ちょっと戯^{おど}けたような仕草をした人物埴輪や、当時の生活の様子を表現した^{しぐさ}形象埴輪は、何か我々に語りかけるような^{けいしやう}感じがして親しみがもてるものです。この埴輪が川越でも発掘されたと知らせると、子どもたちは目を輝かせ、歴史をより身近なものに感じるだけでなく、さらに調べてみたいという動機付けが得られてきます。

そこで、常設展示の中で、様々な川越市内の古墳の出土品を調べたり、その背景となるものを考えさせていきます。その際、館職員と担任の先生によるミニ授業が効果的になってきます。例えば、ある学校では「古墳時代を探ろう」という学習課題を設定し、子どもたちが展示資料やその解説の表示、館職員への質問などから埴輪の種類やその意味、市内の豪族の力の大きさを考えていきます。さらに、当時の住居跡である御伊勢原遺跡の出土品や資料から古墳時代の人々の生活の様子や知恵も考えながら課題解決を図っていきます。このようにして、学校の授業だけでは知ることのできなかったことに気づき考え、より深められた学習内容となり、その活用効果は大きなものとなります。

博学連携という視点に立ったバス利用による博物館活用は、各学校が教育課程に位置付け、博物館と学校が協働して子どもたちに「生きる力」を育成することを目指しています。そのためには、双方が共有できる教育資源を見つけ、それらを利用できる体制を整えることが重要であると考えられます。博物館では、こうした目的を踏まえ、子どもたちの思いや願いに応え、学校教育への確かな支援ができる場となるよう取り組んでいます。（教育普及係 井口修一）

上寺山の獅子舞 (川越市指定無形民俗文化財)

入間川の東岸に位置する上寺山地区には二つの祭りがあります。このうち、第39号で御紹介したまんぐりは天王様と呼ばれる夏祭りの一種ですが、今回は秋の祭りである獅子舞を御紹介します。

上寺山の獅子舞は、毎年川越まつりと同日（通常10月第3土曜日）に行われています。行事の中心は県道にほど近い地区の公民館と、そこからやや離れた川岸の八咫神社です。

当日はまず公民館で準備を整えます。獅子（大獅子・女獅子・中獅子）・山の神・ササラッコ・笛方・唄方という構成で、正午頃出発し、八咫神社へ向かいます。八咫神社に到着すると、境内で竿掛かりを含む「ナカダチの舞」と「十二切の舞」を奉納します。獅子舞が行われる10月の中旬は晴天に恵まれることが多く、獅子や山の神は汗みづくになって熱演します。

獅子舞の起源はさだかではありませんが、地区には次のような伝承が残されています。秋元但馬守が川越

城主だったとき、竹姫という娘が眼病を患いました。病気がなかなか治らないことを伝え聞いたこの地の村人が、神社境内で21日間獅子舞を奉納し祈願したところ、たちまち姫の眼病は癒えたといいます。これを聞いた殿様はいたく感服して、葵の紋の入った麻幕を賜りました。

この麻幕は傷みが激しくなったため新調しましたが、現在でも神社に張られる幕には葵の紋がしっかりと入っており、歴史の古さを感じさせます。

神社での奉納を終えた一団は公民館に帰るともう一度獅子舞を演じて、行事を終えます。



Information

平成18年度の博物館主催行事です。(3月まで)

講座・教室 etc.

<一般向け事業>

開催日	1/20(土)・21(日)	1/28、2/4・11(日)	2/25、3/4・11(日)
講座名 内容	◆土器作り講座 縄文土器作り	★博物館歴史講座 川越藩の成立と発展	★博物館歴史講座 川越の建物Ⅱ -近世・近代の町家と寺院-
申込み開始日	1/6(土)	1/5(金)	2/1(木)

<子ども向け事業>

「土曜体験教室」は、午前10時～11時30分と午後1時30分～3時30分の時間帯で行います。

開催日	12/16(土)	12/23(土)	1/6(土)
講座名 内容 申込み開始日	☆土曜体験教室 お正月飾りを作ろう 12/1(金)	☆土曜体験教室 たこを作ろう 12/2(土)	○子ども博物館教室 古代人のアクセサリー 12/3(日)
1/13(土)	1/27(土)	2/10(土)	2/24(土)
☆土曜体験教室 まゆ玉を作ろう 1/4(木)	☆土曜体験教室 手作りおもちゃで遊ぼう 申込み不要	☆土曜体験教室 昔の単位ではかるとどれくらい？ 申込み不要	☆土曜体験教室 おひなさまを作ろう 2/2(金)
3/10(土)	3/17(土)		
☆土曜体験教室 昔の土笛・土鈴作り 3/1(日)	☆土曜体験教室 くさり細工を楽しもう 3/2(金)		

※変更の可能性もあります。申し込み方法も含め、詳細については「広報川越」を御覧ください。お問い合わせは博物館まで。

第17回ミニ展

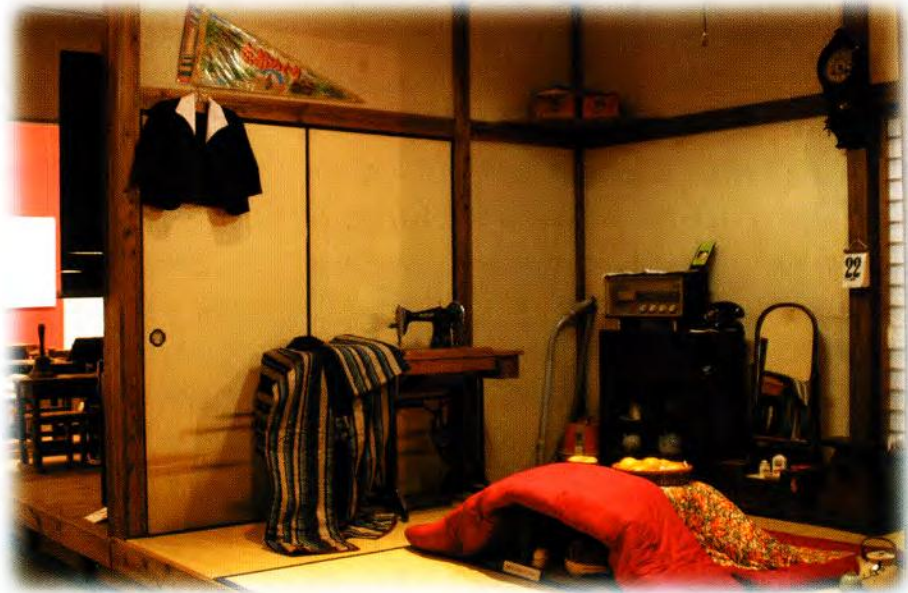
むかしの勉強・むかしの遊び

平成19年1月16日(火)～3月4日(日)

毎年恒例の「むかしの勉強・むかしの遊び」展の季節になりました。今年もお父さん、お母さんが子どもの頃の駄菓子屋・台所・居間・教室といった情景の再現とくらしを豊かに変えた電化製品や勉強道具の移り変わりを中心に展示します。

また、おじいさんやお父さんが子どもの頃の漫画も展示します。「読み過ぎはダメよ」と言われながら読んだ漫画は、その頃の子どもたちが心をおどらせるものの一つでした。当時の漫画をお持ちの方に御協力いただき、今回はその一部を展示します。

ぜひ、この展覧会でちょっとむかしの世界に来てください。



利用の御案内

◆入館料

区分	博物館	川越城本丸御殿	川越市蔵造り資料館	共通入館(観覧券)			
				●博物館 ●美術館	●博物館 ●本丸御殿 ●蔵造り資料館	●博物館 ●本丸御殿 ●蔵造り資料館 ●美術館	●博物館 ●本丸御殿 ●蔵造り資料館 ●美術館 ●まつり会館
一般	200円 (160円)	100円 (80円)	100円 (80円)	300円	300円	450円	800円
大学生 高校生	100円 (80円)	50円 (40円)	50円 (40円)	150円	150円	220円	600円

※()内料金は、団体(20名以上、1名につき)の場合

◆開館時間 午前9時から午後5時まで(ただし入館は4時30分まで)

◆休館日 月曜日(休日の場合は翌日の火曜日)※川越まつりの翌日は開館
第4金曜日(休日を除く)年末年始(12月28日～1月4日)
特別整理期間(12月中旬予定)

*開館時間・休館日は、博物館・川越城本丸御殿・川越市蔵造り資料館とも同様
(特別整理期間は、博物館のみ休館、蔵造り資料館は1月2日から開館)

交通案内

東武東上線・JR川越線 川越駅より
または西武新宿線 本川越駅より
東武バス「札の辻」下車徒歩8分
・御来館の際は、なるべく電車、バス
を御利用ください。



発行日 平成18年12月16日

発行 川越市立博物館

〒350-0053 川越市郭町2丁目30番地1 ☎049-222-5399 FAX 049-222-5396

Eメール hakubutsukan@city.kawagoe.saitama.jp

ホームページ <http://museum.city.kawagoe.saitama.jp/>